

## 鹿児島の昆虫 78

## 「大隅半島の昆虫」

昆虫担当 中峯 敦子

鹿児島県の大隅半島（以下、半島）では、黒潮の影響を受ける東岸部に亜熱帯性植物植生が見られます。また、南限のブナが生育する高隈山や肝属山地には、貴重な照葉樹林も残っています。このような植生や地形が生み出す独特の環境に、興味深いルーツをもつ昆虫を紹介します。

## 1 南限の昆虫

ミズイロオナガシジミは、国内では北海道から鹿児島に分布しています。鹿児島では霧島～大隅半島にかけてのみ見られ、南大隅町大泊が、分布の南限です。



ミズイロオナガシジミ（裏面）

分布南限種が多いことは、半島に生息する昆虫の特徴のひとつです。約 2 万年前、冷温期だった時代に、広く生息していたのは北方由来の昆虫でした。それらは、後の気温上昇による植生の変化とともに高隈山など山岳上部へと隔離・遺存されたり、食餌植物とともに平地に居残ったりしたと考えられます。現在、半島のミズイロオナガシジミは、平地のクヌギ林に依存しながら生息しています。

## 2 種子島や屋久島との共通性

種子島、屋久島との共通種が多くみられることも、特筆すべきことです。約 13 万年前、半島と 2 つの島々は、陸続きでした。この地理的なつながりが、これらの地域に共通種をもたらしました。この後、それぞれの島と半島は海で隔てられることとなりますが、大噴火による火砕流など、困難な状況を乗り越えた昆虫が、現在まで生息を続けています。

石川県能登半島と九州東岸に特異的な分布をするイカリモンハンミョウは、県内で志布志湾岸と南大隅町、屋久島、種子島に分布していました。これらの地は、かつての地理的なつながりに加え、黒潮による温暖湿潤な環境と細砂の海浜があったことが、このハンミョウの生息を支えてきました。



砂浜のイカリモンハンミョウ



当博物館に「1963 年 8 月 13 日佐多町大泊」のラベルがついた、イカリモンハンミョウの標本(左)があります。約 60 年前、現在の南大隅町大泊海岸で採集されたものです。しかし、今、大泊海岸にこのハンミョウの姿はありません。同様に屋久島も近年の記録はなく、これらの地域では絶滅したようです。この標本を見ていると、海浜が非常に不安定な環境であること、一度失った環境や生物は、簡単に戻らないことを語っているような気がしてなりません。

さて、大隅半島の昆虫の物語は、まだまだたくさんあります。半島の生きものを訪ねて、今度はフィールドに出かけませんか。

